

続・東区物語

丘珠村開拓に賭けた 清国人農民たちの

挫折と栄光



明治時代の丘珠の様子
(さっぽろ文庫50「開拓使時代」より)

一八七六（明治九）年六月、札幌の北東部、現在の丘珠地区に相当する地域に、異国から十人の青年がやって来ました。その当時、寒冷未開で、生活がままならなかったこの地に、彼らは何を夢見ていたのでしょうか。

郷土の歴史をお伝えする会「東区物語」で語られた、清国人の農民たちの知られざる開拓物語をお送りします。

東区物語（第三話） 語り：田中和夫氏

（北海道文学館評議員）

北海道開拓の人手確保

明治の初頭、未開の寒冷地北海道の開拓に従事するため、人手が集まらず困っていた開拓使は、隣国、清国（現在の中国）に目を付けた。当時の清国は、イギリスとのアヘン戦争の敗戦の影響などにより、国全体が疲弊し、失業者があふれていたため、生活の苦しい人々を北海道に迎え、開拓に貢献してもらおうと考えたわけである。

開拓使では、北海道への輸入を積極的に進めていた綿羊

の産地、清国の山東省に役人を派遣し、十人の農民を集めた。同省は、綿羊輸入でのつながりや、気候が北海道と似ていること、当時、開拓使で醸造を予定していたビールの原料、大麦の栽培地であったことなどから、北海道移住者を募るのに適地と考えられた。

こうして日本に渡った清国人の農民たちは、一八七五（明治八）年十二月、開拓使東京出張所に集まり、当時の同所勤業課長村橋久成に出迎えられた。ビール工場建設に深く関わっていた村橋は、彼らの持つ大麦栽培技術を非常に重要と考えていたので、彼らが北海道に渡るまでの準備を取り仕切った。その後しばらくの間、彼らは東京で、外国人農業技術者エドウィン・ダンなどの指導を受け、北海道農業に関する実習を行い、彼らが栽培した大麦が札幌に送られ、国産第一号のビールの原料となっている。

募集の触れ込みと違う 仕事内容

清国人たちの日本移住は、三年間の期限付きで、期間中

の月給は約五円と、当時としてはかなりの高給（学校の教師と同水準）であった。そのほか、北海道で彼らが収穫する作物も開拓使が買い取り、その代金も直接、彼らの収入となった。清国では「日本と技術交流をするための専門家を」という触れ込みで集められたようで、収入面は、それにふさわしい待遇であった。しかしその反面、従事する仕事内容については、彼らの期待を裏切るものであった。

彼らは、東京出張所で、札幌の市街地に近い札幌官園という試験農場で大麦の栽培をすると説明されていた。しかし、その農場がそのころ開校した札幌農学校（現在の北海



昨年11月6日、東区民センターで田中和夫氏による語りの会が開かれました